

私の死生観

尼崎市 宮 出 一 夫

私は8歳の頃より気管支ぜんそくの発作を起こすようになりました。この発作、呼吸困難がおこると、就寝はおろか、横になることもできません。

塩酸エピレナミンとか、ボスミンという気管支拡張剤を皮下注射すると、たちまち呼吸が楽になり、常にこの注射を待ちわびる生活でした。

ただこういうキツイ注射は「体に悪い」ので、一度打つと数時間後でない、再度注射することは許されませんでした。発作の激しいとき、この注射の効き目は約2時間。それから先はただ我慢だったのです。

こういう生活なので、私の願望は、「この苦しさから解放されるなら、死んでもいい」といつも考えていました。これが私の幼少期の死生観でした。

その後、コーチゾン、ステロイド剤など有効な薬が開発されて、徐々に発作に苦しむことはなくなりました。35歳になって、フィックスの「奇跡のランニング」を読み、ジョギングに憧れるようになりました。

おそろおそろランニングをやってみました。最初は数十歩走るだけで苦しくなったのですが、おそれず数歩ずつ走る距離を伸ばし、半年後には4キロもランニングすることができるようになりました。

このような努力の結果、だんだん体力がついてきて、元気になりました。人生でのうち、もっとも好ましくないのは「現実逃避のため、死に憧れる」ことです。寿命はそれぞれに定められているにせよ、行く末を見据えて、各人が主体性を持つことが必要。それが死生学の目標であろうと考えます。

死生学に巡り合えたことは幸せなことでした。



尊厳死と私

神戸市中央区 高齢者問題研究家 中 谷 庄 一

敬老の日の総務省の発表によると、我が国の高齢化率（全人口に占める65歳以上の高齢者の割合）が26.7%と過去最高となった。2040年には36.1%になると推計され、世界一の高齢化国になると予想される。即ち3人に1人が65歳以上のお年寄りということになる。

高齢者の医療・福祉・介護・年金等、国としても考えなければならないことが多すぎる。しかも世界でも例を見ないスピードで我が国の高齢化は進んでいる。高齢化対策は待ったなしであり、急がなければならない。

その場合、最も困難な問題は財政問題であろう。景気低迷による税収不足、1,000兆円を超える国の借金、これらの諸々のツケは全部若年者にまわされるのである。ほとんどの高齢者が健康で長生きできればこんな結構なことはない。しかし、病気をし、しかもその病気が不治の病であったり、他の人の手助けがないと生存できない状態となったとき、長生きが自分にとって、そして他人にとって幸せなのだろうか。

昔は、親・子・孫3世代が同じ家に住み、順番に親の面倒を見てきた。また現在のような高額医療もなく、寿命が来たら自然に死んでいった。それが自然の摂理であり、他人に迷惑をかけない長生きの仕方であった。

親思いの子供ほど、自分の日常生活・会社生活等と介護とのジレンマに悩む。そういうことを考えると、不必要な延命措置までして生きることはない。自分の幸せな死に方について、もう少し考えておく必要がある。

私は、尊厳死協会の会員になっている。不治の病で死期が迫ったとき「私は植物人間状態になった時など、延命措置は一切お断りします」という宣言書（リビング・ウイル）を書いている。こうしておけば、本当に自分のことを思ってくれた家族や、主治医の先生を犯罪などの窮地に陥れることは防げると思う。

人生最後の最も難しい仕事として、どのように死へ軟着陸するか、尊厳ある終末を迎えられるかを考えておきたい。

八上桐子の **川柳の窓** 選者 八上 桐子

元時実新子主宰「川柳大学」会員
神戸新聞文藝川柳壇選者など多方面で活躍の川柳作家

ご投稿ありがとうございます！カフェ・タナの川柳の目、耳はなかなか個性派ぞろい
です。それでは、秋の句から…。

彼岸花雑がさいしよに火をつけた 実憂

燃え広がる野火のようにとつと咲く彼岸花は、まさに降って湧いた災いの
イメージ。いつ誰から始まったの？…しばし立ち尽くします。

バスを待つ峠ならでは花談義 松の決

開放感からでしょうか、いつになく多弁になる峠のバス停。澄んだ空気の中、
交換しあう花の名…清涼感あふれる一句です。

若者にやばいやばいとほめられる 小雪

素晴らしい、おいしい、カッコいい…全部「やばい」若者語。肯定的に使
われることの方が多くなりました。言葉にも生きる力があるのですね。

けいたいに首つたけなり電車内 河村

まさに。萎れたようにうなだれる首、首、首…、それぞれは誰かとなが
つているのにさみしい光景です。

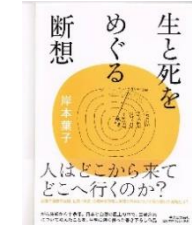
骸骨がメールしている風呂上がり 未早

こちらはまたなんとシニールな！ですが、骨になってもケータイだけは離
さないかと思えるところが不気味。…やばい、やばい…。

※あなたも川柳に挑戦してみませんか？ご投稿をお待ちしています。

BOOK★CINEMA★DVD

「生と死をめぐる断層」 岸本葉子著
介護や医療の分野で、あるいはまた遺言・葬儀など終活論議が盛んである。では、肝心の自分の死そのものを受け止める心の準備はどのように考えるのか。



40代でがんを患い、一時死を覚悟した著者は、まさに素手で地面を掘るようにして自分の死を探してゆく。その思索の遍歴を記したのが本書である。

死とは、神とは、宇宙とは、時間とは、そして永遠とは。
宗教、靈性に触れながらも祈る人とはなりえない。時間の概念や大乘仏教の根本思想である「空」や「色」、「縁起」を図形で理解しようとする。自然科学には全く触れていないのが気になるが、親鸞 本居宣長 柳田国男 鈴木大拙など、近時では、玄侑宗久 島蘭進…、思索と知の多彩な巨人群の著作を読み込んで、自己の存在と死の謎に肉薄する。

「領域のほんの端にたどり着いただけであり、悟りを得たわけでは無論ない。この先、病あるいは老という形で再び生死に向き合った時、やはり脅える『わたし』がいるのだろうか」と、「あとがき」で著者はつぶやく。

本書は、死生についての数多の書をランダムに巡り歩いた自分と重なり、「やはり脅えるわたし」という部分にも同感する。(大利敬郎)

【中央公論新社 1,500円】

2015年賛助会員（敬称略・順不同）
ご支援ありがとうございました
西村京子、吉田文子、佐野百合子、武市いつ子、伊藤容子、北垣正、中崎克美、松田利庸、八上桐子、森美樹・有子、田村佳生、清水正子、坂口寿賀子、宮出一夫、匿名希望3名

編集後記
「年内に出せたらいいねえ」と言っていた『想文研だより第2号』を、願いどおりに出せることになったのは嬉しい限りです。予想外にたくさんの投稿をいただいたのが私たちのやる気に火をつけてくれました。今回「スタンバイ」になった原稿も、しっかり編集室に保管して出番を待ってもらいます。それに井上編集長のインタビューに同行して、お会いした79歳の中村桂子さんの目力にも押されました。記事からも覗えるかと思えます。投稿は締切りなし、いつでも受け付けます！（上村くにこ）
イラスト／奥田 秋穂
協力／ハロー！パソコン教室六甲校